

自伝における子供の読書

——大人の本，聖書，挿絵のある本——

加藤 林太郎

1.

アナトール・フランスの作品においては、書物が事件の主役となることがある⁽¹⁾。アカデミー賞を得たデビュー作『シルヴェストル・ボナールの罪』では、目録に記載の14世紀の古書を追って、老学者はシシリー島へと旅し、競売場で苦戦する。最後の小説『天使の反逆』では、小心な図書館係の苦悩を尻目に、貴重な図書が何者かによって次々と持ち出され、その奪還のため真面目な図書館係は殺人を犯し、発狂する。そして作者の父は革命期の資料を専門とする古書店を営んでいた。しかし彼の4冊に上る思い出においては、主人公の少年はアナトールではなくピエール、父は古書店主ティボーではなく町の医師ノジュール氏になっている。彼の思い出物語からは、彼がその中で暮したはずの形大な書物が姿を消したわけであり、こゝに作者幼時の書物的環境を伺うことはできない⁽²⁾。しかし、多くの作家において、幼時の読書は、アナトール・フランスがどこかへ移してしまった父の書齋から始まるであろう。彼を主人公とした短篇集と化しているアナトール・フランスの「思い出」に意外にとほしい子供の読書の思い出を、いくつかの作家自叙伝において求めることにしたい。

2.

父の死後、父の書齋へ出入するのを母はジイドに許さなくなり、いつも鍵が

かかっていたと言う。書斎は亡き夫の、なつかしい思い出が呼吸している祭壇のようなもので、あまりに急に、息子が父の位置を奪うことはよろしくないと思母は考えていたらしいのである。そこにあるのは子供のための書物ではなく、まだ自分の部屋と廊下にある書物で十分だというのであった。スタンダールは父の書棚の高い段にある『新エロイズ』を鍵を使って盗み出さねばならなかった。しかし多くの作家の場合書斎は開放されていたと言ってよい。

コレットは『クロディーヌの家』で、多くは生まれる前からあった書物の一ぱい填った部屋のことを思い浮べるのには、ただ眼をつむりさえすればいいと言う。「昔は、暗闇の中でもそれが見分けられた。わたしは毎晩その中の一冊を選ぶのに決してランプなどは持ってゆかなかった。ちょうどピアノでも弾くように棚に沿って指を触れるだけで十分だった⁽³⁾。」

サルトルの祖父の書斎にはいたる所に本があった。「私は自分の人生を、おそらくそれを終える時と同じようにして、つまり本に囲まれて始めた⁽⁴⁾。」と『言葉』で言っている。彼は箱入り息子で、普通の子供のように、決して土をほじくりかえしたり、鳥の巣を探し歩いたりはしなかったのである。本がその鳥であり、巣であり、田園だった。彼は書斎を神殿と見なした。いわば彼は聖職者の孫であった。教職にあったサルトルの祖父の蔵書は仏独の古典的名著であり、アメリカ南部出身のグリーン家の場合、南部の正当性を唱えた本が書棚の数段を埋めていたという。

しかしスタンダールにとって最も重要な蔵書は母の所蔵する原文のダンテであった。「祖父はイタリア語を知っていて、それに敬意を払っていた。母はダンテを読んでいた。今日でもきわめてむずかしいことだ⁽⁵⁾。」こうしたことが母方のガニオン家はイタリア出身だという確信をもたせたところの決定的な証拠なのである。ガニオンはイタリア名のグアダニであり、そのグアダニ家のものがイタリアで殺人を犯し、1650年頃、法王の特派使節のようなものについてアヴィニオンへやって来たのだという有名な家系伝説を自作させることになるのである。

しかし父の本棚に並んでいる書物は、たしかにジイドの母が言うように「子

供のための書物ではない⁽⁶⁾」であろう。では彼ら子供はそれらをどのように読むのであろうか。

3.

「たったひとり、おとなたちの間にいた私は、ミニチュアのおとなとなり、おとなたちの読む本を読んでいた⁽⁷⁾」とサルトルは書いているが、母の残した小説類を父と共に徹夜して読み尽したルソーも状況はサルトルと変わらない。しかもルソーは仕事上の父にそれらを読んできかせたという。コレットのクローディーヌの母はサン・シモンの『回想録』を毎晩一冊ずつ枕もとに運び、幾度読んでもつきない喜びを見出していたのであるが、「お前は どうしてサン・シモンを読まないの?⁽⁸⁾」と8才のクローディーヌによくたずねたそうである。ルソーの父もクローディーヌの母とともに大人と子供の読書は共通であり前と思っているのであろう。エミールが読んでもよい本はただ1冊『ロビンソン・クルーソー』だけだとルソーは言っているが、放置すれば子供は手あたり次第に読むものと思われる。

グリーン少年は「何でも読む主義の私」と称してラビッシュの戯曲を読み、「私は手あたり次第に読む主義だった」ので『ボヴァリー夫人』を読んだという。それらの中から敬愛する作家を見出すということが勿論起る。ルソーにとってのプルタルコスがそうであろう。『孤独な散歩者の夢想』の中でも、「これは僕の幼年期における最初の読書だったが、僕の晩年における最後のものにもなるであろう。読む毎に、かならず何等かの獲物を得るという点で、これは唯一の著書だといっている⁽⁹⁾。」と述べている。スタンダールにとっては、それに当たるのがルソーその人であり、さらにはアリオストであった。「アリオストは私の性格を形づくった⁽¹⁰⁾。」と言うし、「『新エロイズ』を読んだこととサン・ブルーの良心の悩みが私を心底から真人間にしまった⁽¹¹⁾。」とも述べている。

クローディーヌが2冊のラールス辞典の間にはさまって読んだというラビ

ーシュ、ドーデ、メリメ、それに『レ・ミゼラブル』は、そのような権威を持つに至ったとは思えないが、「実際に恋を知る年頃よりはずっと前に、恋愛というものは複雑で、暴虐で、ずいぶん厄介なものでさえあるということを悟った⁽¹²⁾」のではある。クローディーヌの母はこの恋愛に難癖をつける。「これらの書物に、こんなに沢山恋愛のことばかり出てくるのは、ほんとに困ったものだわ。(…)実際の生活には、人々はもっとほかにもする仕事があるのだよ⁽¹³⁾。」文学の異常は恋愛過多ばかりではない。サルトルは「本の中へ、人生と狂気に会いに行った⁽¹⁴⁾。」という。ブルトウスやマテオ・ファルコネが息子を殺すことは理解をこえることだったし、妹を持って愛したいと思っているサルトルにとって、オラースの妹殺害は彼を憤激させるものだった。

読者は幼いのであるからには、書物の内容ばかりに親しむのではない。作品の内容と書物の物としての属性が一体化する。フローベールもユゴーも、サルトルの見たかぎりでは完全には死なずに書物に変身していたのだった。例えばコルネーユは赤ら顔で、ざらざらした手触りの太っちょで、背中は革張りで糊の匂いがしていた。しかも重くて持ち運びに不便であった。つまり努力の表象であった。そこで背後でドアが開くと、サルトルはぱっと跳び起きると、ミュッセを元の場所に戻し、重いコルネーユを取りに行くのであった。しかし、この様な演技まじりの読書とともに寝室や食堂のテーブルの下などで、ひそかに「本物の読書」もしていたのであって、鉄拳ボクサーや飛行士のことを思いふけた。もっとも、それが無価値な読書であることに気づいていたから内証にされていたが、この二重生活は今日まで途絶えず続き、哲学書より推理小説の方を楽しんで読んでいるという。

このように大人の本を子どもも読んではいるが、当然のことに、子供に読ませたくない本もあるのであった。ルソーは自らの『新エロイズ』の序で書いている。これは婦人の読むべき本であるが、娘は別問題だという。「純潔な娘は未だかつて小説など読みはしなかったし、またわたしとしては、これを開けば疑いの余地がないくらい決定的な題をこれに付けておいたのである。この題をも無視してあえて一頁でも読もうとするような娘はいたずら娘だ⁽¹⁵⁾」と。

しかし反逆家スタンダールは断言している。「つまり私は、家の者たちの意志に反して隠れて読んだ本のおかげで、まともな人間になったのである⁽¹⁶⁾」と。

王政復古の時代にはヴォルテールやルソーの本を焼くなどのことも行われたが、ルナンの『少年青年時代の思い出』にもその事実を母の思い出話として述べている。世紀末には自然主義の作家が警戒されていた。グリーン之母はフランス語の本をむさぼり読んだが、ことにモーパッサンが好きだった。「1906年当時の、多くのアングロサクソン人の目には、モーパッサンはいわば口にするのも恥ずかしい作家だった⁽¹⁷⁾。」きわめて宗教心のあついグリーン之母にそういう読書傾向があったことは驚きに値すると作者は言っている。また両親は子供たちの前で、子供たちには見る権利のない諷刺雑誌『笑い』を読んだものだという。そしてゾラが警戒されていた。グリーン之母の先生はゾラびいきで、しばしば家に来るのにゾラを一冊小脇にかかえて来た。「しかし、ゾラは読んではいけませんよ⁽¹⁸⁾。」と言うのだった。クロード・ド・ヌーの父さんは机のひき出しにゾラを隠していた。「彼はゾラのものには弱っていた。そこで私たちに読ませてい、本と読ませてはいけない本とを区別しようともせず、黄色い沖積層みたいに定期的に増大してゆく山のようなゾラの全集を、悉く禁読書目録の中に入れていた⁽¹⁹⁾。」そして事件が起る。母が貸してくれた数冊のゾラではあき足らず、クロード・ド・ヌーはさらに一冊『生きる喜び』を盗み出すが、出産の場面を読むと、「自分の小娘としての運命が怖ろしくなり⁽²⁰⁾」気を失って倒れる。

4.

「家族で行う夜の朗読のほかに更に、毎朝寝床の中で私は、起きる前に聖書の一章を読んだ⁽²¹⁾」と書いているのはロチである。ロチの先祖はオレロン島で、迫害の時代に信仰を守ったカルヴィニストであった。家の大きな客間の中央の卓上には先祖の尊敬すべき遺品である16世紀の大きな聖書が置かれてお

り、就寝の前には、家族うち揃っての毎夜の礼拝が行われるのだった。もっとも子供の彼が自分一人で聖書を読む時はいつも、壮大な創世記、光と闇との分離、或は黙示録の幻想や驚異を選んだそうである。

ロチは少年時代もとは牧師志望であり、さらには宣教師たらんと望んでもいたのである。宣教師という天職は、多くの遠い旅であり、危険の絶えぬ、波乱の——しかも主の聖き御旨のための生活であったから、すべてが調和する仕事のように彼には思われた。しかし、そのうち彼の信仰は小さな傷を受けるに至る。しかもそれは教会においてなのである。「一たいに註釈とか人間的推理とかいうものはいつも私において聖書や福音書を小さめ、それらの書の持つ暗い快い大なる詩の細部を私から奪い去った⁽²¹⁾。」説教が聖書の魅力を損うというのであろう。結局彼は海軍を志望することになった。

グリーンの母は学校から帰って来た彼を中庭の見える部屋に呼び英語を読ませるのだったが、また別の時は聖書を読ませた。少年に、書かれていることがよく分ったとは言えない。むしろ「輝かしい支離滅裂⁽²²⁾」であったのだが、母はなにも説明してはくれず、彼はなんの質問もしなかった。それでよかったのだという。「聖書は、あまり根掘り葉掘りきいていい相手ではないのだ。ふつうの本が本でしかなくても、聖書は一個の人格だった。聖書の中に見出だすのは神の言葉であり、それゆえ真実だった。ふつうの本にあるのは、時に真実のこともあるが、他面、そしてたいてい、大して重要ではないのだ⁽²³⁾。」母の考えを文字通りに解釈して、たしかにそれは一冊の本ではあるが、その上に他のいかなる本も重ねてはならない本だと考えていた。

聖書の文章はよく分からなくても、その絵は子供に、思わぬ印象を与える。幼いグリーンは友だちがなく、いつもひとりで何かの遊びをしていた。聖書がある日そのひとり遊びのお手本を提供する。母が時に、子供たちに読んで聞かせるふんだんに絵が入った聖書を貸してくれた。「文章はよくわからなかったが、いろいろな絵をむさぼるようを見た。」その絵のひとつが彼の心に異常な影響を及ぼして、あやうく小さな悲劇を引き起こしそうになる。すなわち、みずから大司教になり、全燔祭をとり行いたくなったのである。供物の出ている

くわしい挿絵が、真似するのに好都合だったのである。「私は奴隷のような模倣精神で、挿絵そのままを再現しようとした⁽²⁴⁾。」大司教の衣装には母の赤い部屋着を用いるなど、祭壇に至るまで何とか出来上った。だがしかし、たったひとつ彼を少し悲しませることがあった。「挿絵には、煙の出ている供物が描かれていたからだ。」獣の丸焼きの代わりに、何か高価なものが供物として神に捧げられねばならない。そこで父がこの上なく大事にし、毎日曜日に教会に行く時か、正式の訪問以外には使わないシルクハットに白羽の矢が立つ。しかし彼がマッチ箱を探しているうちに母と姉が現れてこの全燔祭は中止となる。

アンリ・ベイル少年の前にも絵入りの聖書があった。ただし彼はそれに好意を抱いてはいない。彼は二人の少年仲間とイエズス会士ライヤヌ師からラテン語を学んでいた。あとから思えば、子弟の教育を貴族的たらしめようとした親の意図にも腹が立つが、当時は他の子供と遊ばせてくれない囚人の生活を彼はのろうのだった。「私は師を憎み、この僧侶の権力の源である私の父を憎み、その名のもとで彼が私に圧制をくわえた宗教をなおさらに憎んでいた。」彼は学友に、自分たちに教えられることは何もかもつくり話だと証明した。「私たちは緑色の装幀の版画入りの大きな聖書をもっていた。その木版画は本文のあいだにはさまれていたが、子供たちにとってこれ以上よいものはない。私はたえずこのあわれな聖書のなかに笑うべき点を探しもとめていたことを思い出す⁽²⁵⁾。」アンリ・ベイルという、すでに反僧侶的な小懷疑家が、不敬な理屈を考えつくのを、恐らく聖書の豊富な挿絵は心ならずも手伝ったことであろう。

5.

「ある時ね、女の子が……植民地のとても大きな木の實をむくとね……そこから獣が一匹、緑色をした獣がとび出してきて……女の子に噛みついたの……そうして女の子を殺してしまったの。」と仲好しのアントアネットが話をしてくれたのだったが、ロチにとっては、この中の一言が夢想へ誘う鍵であった。

「植民地の大きな木の実」というこの文句だけでも私はたちまち夢の中に投げこまれ、樹木や、妙な果物や、不思議な鳥の棲む森などの幻が浮んだ⁽²⁶⁾からである。彼は贈物に貰った『若い科学者』という本の挿絵によって棕櫚の木というものを始めて見たのであったが、彼はそれを見たのではなく「思い出した」のだと強調している。のち再びこの本のまずしい挿絵を目にした彼は、もしすでに心が回想でこね上げられていなかったら、わずかの夢でも彼の心に生まれさせることができたとは思えないのであった。

兄がポリネシアのタヒチへ出征するに当って14才下の幼い弟にくれた金色の大きな本、それは絵のたくさんはあった『ポリネシア紀行』で、巻頭には芦の冠をいただき、棕櫚の木陰に坐す「タヒチ女王ポマレ陛下のお姿」があり、さらに先には二人の美女が海岸で花の冠をかぶり胸を露わにしている絵もあって（浜辺のタヒチの娘）と書かれていた。それが幼年時代のはじめに彼の好んだ唯一の本だという。兄の出発に続いた冬の間、彼は、もらった『ポリネシア紀行』の絵を描きながら多くの娯みの時を兄の部屋で過した。まずこの上なく念入りに花の枝や鳥のむれを色どり、次には老人たち、さらには「浜辺のタヒチの娘」二人を色どるのであった。兄のくれた本の挿絵をこの小さな読者はただ眺めるだけでは満足せず、描くことで夢想の力を倍化させようとしたのであろう。ただし彼はタヒチの娘たちを白くして、美しい人形かニンフたちのように描いてはうっとりしたのだと言っている。海軍軍人といういわばプロの旅行家となるロチの少年時代を時空をはるかにこえた夢想へと挿絵はいざなったのである。

アンリ・ブリュラールはのちの絵画評論家スタンダールであるから、挿絵の評価は甘くなかった。グルノーブルから2里のところにある父の家では、父の農業談義に悩まされていたのだったが、そのつぐないとなったのが全40巻のヴォルテール全集であったという。もっとも、それは危険な本とされ、ガラスの立派な本箱の最上段に置かれていたのである。彼はそのうちの2冊を盗み出したが、「神の恵みによって、こんな年頃においてさえ、版画は私に滑稽に見えた。しかも何という版画！ 聖処女（ジャーヌ・ダルク）の版画挿

絵⁽²⁷⁾。」この挿絵のおかげで彼はよき趣味をもつようになったのだし、他日『イタリア絵画史』を書くように運命づけられたのだと思いこんだほどだと述べている。あまり好きになれなかったヴォルテールとちがってモリエールは文学上の模範であった。「7才のときからはやモリエールのように劇を書こうと決心していた」からである。しかし彼が本棚で見つけたモリエールの「版画は私には滑稽に見え」と言っている。それゆえ『ドン・キホーテ』はその例外であろう。「立派な本箱の中からフランス訳の『ドン・キホーテ』を発見した。この本には挿絵があったが、本は古くさい外観をしていた。そして私は古くさいものはすべて憎悪していた。」だが、おしまいに彼はその版画を理解するようになり、それは彼におもしろく思われたと述べて、挿絵のサンチョ・パンサを原稿に描きとめている。父や先生や叔母の圧制のもとで、母の死後いちども笑ったことがなかった少年が『ドン・キホーテ』で死ぬほど笑ったのである。「この本の発見、それはおそらく私の一生におけるもっとも偉大な時期だった⁽²⁸⁾。」

スタンダールにとって、版画は一面警戒すべきものであった。彼はかのサン・ベルナル峠ごえの「真実の回想」を書こうと考えながら嘘を書きそうな危険を感じている。たとえば彼は山からの下りのことをたいへんよくおぼえているのだが、しかし、5、6年後にたいへんよく似た版画を見たことを隠したくないと言う。彼の記憶は、そのため、その版画にすぎなくなっているのかも知れないのである。「旅行中に見た良い絵画の版画を買うことの危険はここにある。やがて版画が記憶全体を形づくり真の記憶を破壊してしまう⁽²⁹⁾。」わが目を信じるスタンダールであるのに、いわば虚像が実物の残像にとって代ると言っているのである。知性派の観察である。挿絵の質について甘くなかっただけでなく、スタンダールはおそらく、挿絵というものの価値についても、挿絵拒否家フロバールほどではなくても、さして期待してはいなかったと思われる。

中学生のグリーンはジェノヴァに住む姉夫妻をたずね数週間を過ごした。姉夫妻が住む邸宅の持主は少し青ひげ的な怪人物で、仕事部屋は煽情的な絵や書

物でいっぱいの禁断の部屋であった。姉を訪ねたグリーンはある夜この部屋にしのび込む。一、二冊の本のページを繰っただけで部屋へ戻ったが、血管の中で血がわき立っているような気がして眠りにつけなかった、と言う。「いまだかつて、エロチックな絵を見たことのない私である⁽³⁰⁾」と言っているが、実はこれより前に少年グリーンは挿絵の中の全裸の人体にわけも知らずひそかに魅惑されていたのであった。「私の上に敵が影を投げかけて来たのは、ようやく私が、十語ぐらいの文を言えるようになった時のことだ⁽³¹⁾」と述べている年頃だから、客間の暖炉のわきの書棚に並んでいる絵入りの大きな本を見ることは禁じられてはいなかったのである。みんなは彼が幼なすぎてなにもわからないだろうと思い、母は彼がその本を見ることなど考えもしなかったのである。ところが彼は床にすわり、驚きと好奇心で目を見開き、「ギュスターヴ・ドレがダンテの『地獄篇』にちりばめた、苦痛にゆがむすばらしい肉体に見入った⁽³²⁾」のである。

読み書きできる前でも、絵は描けるのであった。ある日のこと、この裸体の群れを前にして、不意に湧き起った感嘆の念にかられると、彼は鉛筆を手にし、なかでもいちばん美しいと思える肉体を、力をこめて一気に描いた。テーブルのひとつひとつが記憶の中にとどまっていたから、自分の小さなテーブルの上でもそれは描けた。そこである日、頭ごしに彼の絵を見た従姉妹が「あんた、なに描いてるの？とんでもないわ！⁽³³⁾」と叫び声をあげたのである。ただし、このドレの挿絵の入ったダンテの『地獄篇』は禁断の書であった。彼が自分自身で禁じていたのである。おそらく母の宗教教育に影響されて、はやグリーン心の中にはいつしか純と不純の厳しい観念が育っていて、彼が目にするものが良いか悪いかについて強力な裁決を下すのであった。夏休みを過ごす家の近くに鍛冶場があったが、そこへ蹄鉄を打ちに連れて来られる馬はちらとでも見てはならないものだった。「かれらは非常に美しく、つややかで、丸味があり、つまり不純だったのである。」また水泳を教えてくれることになった水泳の教師は縞の海水着をつけ、腿をあらわにしていたが、彼にははっきり不純と見えたのである。彼が考える地獄の責苦も裸体という問題からの避けがた

い帰結であった。「私の頭のなかには、この男女は裸だったために罰せられるのだという、ばかげた考えがあったようだ。衣服をつけていないというのがかれらの罪だったのである⁽³⁴⁾。」彼は「裸の人間を描く時、普通の世界から秘密の世界、つまり、私の頭の中に存在し、私が紙の上に写したいと願う私だけの世界へと、自分が入っていくのは自覚していた⁽³⁵⁾」のである。この絵はとり上げられたが、母がなにも言わなかったのは、鉛筆と白い紙を一枚渡しておけばおとなしくしている私であり、母にはそれだけで充分だったからだと述べている。

6.

「私は自分自身ではちっとも本を読んだことはなかった。そうして本をひどくばかにしていた⁽³⁶⁾。」とロチは『少年の物語』で述べている。一方、子供の読書に対して『エミール』の中で反対しているルソーは、ほとんど中毒症的な読書家であって、徒弟時代に仕事や仲間が面白くなると長い間忘れていた読書の趣味が戻って来て、この読書を仕事の暇をぬすんでやるため、罰を受けた、と『告白』の中で言っている。ルソーの親方にとって読書は罰すべき罪だったのだが、実は親も必ずしも息子の読書を喜ぶ人ばかりではない。スタンダールの故郷のある友人の年老いた父は羅紗商人で、子だくさんで金のもうかることしか考えず、息子が読書に時間を費やすのを耐えがたい悲しみをもって眺めていた。子供の読書、少なくとも読書への熱中は必ずしも親の歓迎するところではない。また子供の生活の中でも、読書が唯一の楽しみではないはずである。「後年、書物でも、音楽でも、絵画でも、僕が子供の頃、生物を相手にして味わたつたよろこび、生き生きしたあのよろこびを与えたかどうか、僕は疑う者だ⁽³⁷⁾。」事実、我々は蝶を追うジイドを『一粒の麦もし死なずば』の中で何度も目にする。

それにしても彼らが父の書齋を物色して、大人の本ばかり読んでいたように書かれているのは不思議である。ジイドは答えて言うであろう。「当時フラン

スの児童文学には、実に下らないものしかなかった⁽³⁸⁾。」と。父が読んでくれるモリエールの芝居や、オディッセの断章や、パトランの出て来る狂言やシンドバッドやアリババの冒険などを聞いた時のよろこびには及ばなかったのである⁽³⁹⁾。コレットは「クローディーヌと仙女物語」でアニーを相手に言わせている。「子供には子供の本なんか要らないんだってことを大人たちは分ろうとしないんだわ⁽⁴⁰⁾」。そしてドレの挿絵のペローを持ってはいるが絵を見ただけでまだ読んだことがないと言うのである。クローディーヌは、ドレの挿絵に描かれた馬車に乗った姫君や、森の中で眠っている美女の姿に惚れ込み、ペローの原文の中でそれらを見つけようと試みたが、2頁ほど読むと幻滅を感じてふたたびドレの絵に立ち戻ったという。これでも挿絵は物語の説明だと果たして言えるのであろうか。

一方、スタンダールは目の前の風景の中に物語の情景を見ることができた。叔父ロマン・ガニョンの町、サヴォワのレ・ゼシェルへの旅の途中ベルランの森を通ったが、「私はベルランの森に、アリオストの作品に出る諸場面をおいて考えた⁽⁴¹⁾。」彼が山のないパリに失望したのはアリオストの森で恋愛を夢想することができなかったからである。ナポレオン軍に加わってサン・ベルナル峠を越そうとした時も、雪におおわれ、頂上をたえず雲が隠す山々を「J.-J. ルソーならどんな言葉で描写するだろうか⁽⁴²⁾」ということを夢想していたという。スタンダールの想像力は、自然の中に愛する作品の実物大の挿絵を見出すことを可能にしたのだし、その挿絵の画家はほかでもない彼の愛するアリオストでありルソーであったと言ってよいであろう。

テキスト

- ① (a) J.-J. Rousseau : *Les Confessions* (1782, 1789) , *Les Rêveries du promeneur solitaire* (1782) , *œuvres complètes*, I. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard (B. P. と略), 1959.
- (b) *La Nouvelle Héloïse*, *œuvres complètes*, II. B. P. 1964.
- ② Stendhal : *Vie de Henry Brulard* (1890) , *Œuvres intimes*, B. P. 1955.
- ③ Ernest Renan : *Souvenirs d'Enfance et de jeunesse* (1883) , Calmann-Lévy.

- ④ Pierre Loti : Le roman d'un enfant (1890), Calmann-Lévy, 1922.
 ⑤ André Gide : Si le grain ne meurt (1920, 1921), Journal 1939-1949, Souvenirs, B. P. 1954.
 ⑥ Colette : La maison de Claudine (1922), Oeuvres I, II, B. P. 1986.
 ⑦ Julien Green : Partir avant le jour (1963), Oeuvres complètes, V, B. P. 1977.
 ⑧ Jean-Paul Sartre : Les mots (1964), Gallimard.

注

- (1) 加藤「アナトール・フランスの作品における書物」(関西学院創立百周年文学部記念論文集) 参照。
 (2) 同「アナトール・フランスの『少年時代の思い出』——本と子供について——」(人文論究第35巻第3号) 参照。
 (3) ⑥ p. 988.
 (4) ⑧ p. 29.
 (5) ② p. 68.
 (6) ⑤ p. 487.
 (7) ⑧ p. 54-55.
 (8) ⑥ II. p. 989.
 (9) ① p. 1024.
 (10) ② p. 81.
 (11) ② p. 168.
 (12) ⑥ II. p. 989.
 (13) ⑥ II. p. 989.
 (14) ⑧ p. 40.
 (15) ① (b) p. 6.
 (16) ② p. 168.
 (17) ⑦ p. 691.
 (18) ⑦ p. 762.
 (19) ⑥ II. p. 990.
 (20) ④ p. 122.
 (21) ④ p. 252, 253.
 (22) ⑦ p. 730.
 (23) ⑦ p. 730.
 (24) ⑦ p. 664.
 (25) ② p. 73.
 (26) ④ p. 71.

- (27) ② p. 78.
- (28) ② p. 80.
- (29) ② p. 378.
- (30) ⑦ p. 853.
- (31) ⑦ p. 675.
- (32) ⑦ p. 675.
- (33) ⑦ p. 678.
- (34) ⑦ p. 705.
- (36) ④ p. 62.
- (37) ⑤ p. 415.
- (38) ⑤ p. 354.
- (39) ジュール・ヴェルヌは別格扱いなのであろう。グリーンは劇化された『ミシェル・ストロゴフ』を見て、母が心配するほどの興奮状態におちいったし、その原作の小説の方は、サルトルが何度も言及している。なお、観劇の経験についてはシャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』を始め、各自伝に見られるが、ここでは扱わなかった。
- (40) ⑥ I. p. 666.
- (41) ② p. 123.
- (42) ② p. 377.